

“A Good Man Is Hard to Find” の素材について

井 上 一 郎

“A Good Man Is Hard to Find” and Its Material

Ichiro INOUE

(序)

“A Good Man Is Hard to Find” (「善人はなかなかいない」) (1953年) は、William Phillips と Philip Rahv 編集の *Modern Writing I* に発表され、後に Caroline Gordon と Allen Tate 夫妻の手になる *The House of Fiction* という選集のタイトル・ストーリーとして収録された。オコーナーの作品の中で「最もオコーナーらしく」¹、「最も良く知られた小説で、生前と同様、今も彼女の代表作として最もしばしば選集に選ばれている」²。また、二人の批評家³の例外的な評価を除けば、「オコーナーの最良の作品」、「彼女の完璧とも言える芸術品の一つ」などと評価は圧倒的に高い⁴。

オコーナーは *Mystery and Manners* の中で、“A Good Man Is Hard to Find” を「これは、一家六人の物語で、彼らはフロリダにドライブに行く途中、自分のことをミスフィットと呼ぶ脱獄囚に消されてしまったのです。」⁵と述べ、最後に「この物語で皆さんが注目すべきは、祖母の魂に働いた恩寵とかそういったものであって、六人の死体ではありません。」⁶と締めくくったものである。この言葉からは、彼女が読者に何を読み取るように要求しているかが見え隠れしているが、それはさておき、次に物語の概要を示す。

祖母は新聞を片手に、一生懸命息子のベイリーに訴えて、明日出発する家族ドライブの行き先をフロリダからテネシーへと変更させようとしている。彼女が持っている新聞には世間を震撼させた脱獄犯のミスフィットについての記事が載っているのである。息子に対して功を奏しないと分かるや、彼の妻にも同じことを試みるがうまくいかない。孫のウエズリーとジューン・スターまでもが祖母をからかいだす始末である。彼らは実は祖母が行き先に関係なく外出をしたがっていることを見抜いているのだ。

案の定、翌朝、車に真っ先に乗り込んだのは、祖母だった。しかも、家族のほかの者と違って、彼女だけはレディらしく着飾っている。「事故に遭って道路上に死体となって転がった時があれば、誰だって自分のことをレディと見てくれるだろう」というのが彼女の狙いである。

車がジョージアを通り過ぎて行く間、祖母を除いて誰一人窓の外の景色に注意を払う者はいない。孫たちは漫画本を読みふけるか、さっさとお弁当を食べてしまう。ついに喧嘩を始めた孫たちに彼女は自分の若かりし頃、自分に求愛していたE.A.T氏の西瓜が黒人に食べられてしまった面白い話をしてあげる。

家族は道路際のレッド・サミーが経営するレストランに立ち寄り、食事をし、ジュークボックスから音楽を聴き、祖母は主人のレッドとしばし世相について言葉を交わす。彼女たちは、要するに、「善人はなかなかいない」ということで意見が一致し満足である。

レストランを出た後、走る車の中で祖母はうたた寝をしてしまう。Toombsboro という町の郊外で、目を覚

ました祖母は、これまた自分が若い頃、恋人と語らいあった農園屋敷を訪ねてみたいと言い出す。道草などもつてのほかの息子のベイリーは断固拒否するが、祖母は屋敷に隠された財宝の話でつち上げて、孫を見方にして、まんまとベイリーに方向転換させることに成功する。祖母の怪しい記憶をもとに運転するベイリーの車は、気がつけば、次第に人気の無い田舎道を走っていた。その時である、祖母に記憶が蘇り、目的の屋敷は実はジョージアではなく、テネシーにあったことに彼女は気づき、驚いた彼女のひざが飛び上がり、その拍子に旅行かばんをひっくり返し、隠して連れてきていた猫の Pitty Sing が飛び出して、ベイリーの首っ玉に飛びついてからたまらない、彼は運転を誤って車は家族を乗せて道路際の溝に転落してしまったのである。

途方にくれた家族の所に忽然と姿を現したのは、祖母が出発前にあれほど遭遇はしなないと心配していたミスフィットだったのである。うっかり者の祖母はミスフィットを見て、

“You’re The Misfit! I recognized you at once!”

と口走ってしまう。確かにそうだ。彼女のこの言葉が家族の運命をきめたのだ。ミスフィットは、

“Yes’m, but it would have been better for all of you, lady, if you hadn’t of reckernized me.”

と応えるからだ。自分のアイデンティティを知られたミスフィットは、家族をベイリーとウエズリーから順に森に連れて行き、子分に射殺させるその間、祖母は必死にさまざまな方法を用いてミスフィットの気持ちを変えようとする。おだて（「あなたは善い人間だよ」）、お金（「持っているお金を全部あげるよ」）、そして、最後はキリストに対する信仰の話（「お祈りをすれば、イエスは助けてくれるよ」）を持ち出す。ミスフィットに対して最も功を奏したのは、最後の信仰の話で、彼は熱心に自分の犯罪者としての生い立ちを話し、それがすべてイエス・キリストに対する懷疑から来ていることを仄めかす。祖母と話すうちにミスフィットは自分の懐疑心がもたらした出口のない人生に思い当たり、ふと無防備な姿を祖母に晒す。それを見た祖母は、まるで、自分の息子を抱きかかえようとするかのように、身に手を伸ばしたのだ。ミスフィットの反応は意外にも、その祖母を三発の銃弾で一気に射殺してしまう。

一見、何の罪もない平凡な家族六人がある日「消されてしまった」のだから、確かに残酷な物語ではある。森の中に転がっているはずの六個の死体のことが気にならない読者は、オコーナーの言葉に忠実に従ったというべきか、それとも、よほど想像力に欠けていると言うべきだろうか。彼らの死は、あまりにも突然であり、特に殺人犯の命令に慫慂と従う子どもたちの母の姿は悲劇的ですらある。Stephens ならずとも「一体誰が、例えば赤ん坊の殺害を喜劇にできようか？」⁷と抗議するはずである。

一方で、少なくとも小説の前半の祖母の姿の描写には、皮肉、風刺と一緒にユーモアが感じられる。ドライブに着飾って車に乗り込み、自分が死んだ姿さえもレディとして認知されることを要求する祖母が前半の中心である。自らを旧南部の末裔のレディだと称するこの祖母は、家族の中においても外においても疎外されおり、彼女がその生き方、考え方において真剣になればなるほど滑稽さが増す。レッドネックの殺人犯のミスフィットでさえ、祖母の上品な態度に応えるかのように丁寧な言葉遣いを示す。したがって、オコーナー自身が言うように、この小説は「ある意味で喜劇的で定型化した」⁸小説であり、Feeleyによると「喜劇的リアリズムの作品」⁹とも言える。

さらに次のような見方もできる。Asalsは、前半の支配的な調子を喜劇と呼ぶことに吝かではないが、祖母を観察し続けるナレーターの皮肉、風刺的な声が一貫して悲劇的な事件の後半にまで継続して、それは奇妙に不調和の調べを奏でていると指摘する。このような不調和

なナレーターの声は、一方で「喜劇と不気味の混合を維持しながら」¹⁰ 作品の統一に貢献しているとも述べている。

また、作品の統一性は、悲劇と喜劇の混合であるとする Asals の意見を支持するかのよう、オコーナー自身「悲劇的であるための方法は、喜劇である」¹¹と述べている。この作品に見られる悲劇と喜劇の二つの要素の混在する源はどこにあるだろうか。本論では、1980年に発表された J.O.Tate の“A Good Source Is Not So Hard To Find”と1982年に発表された Victor Lasseter の“The Genesis of Flannery O’Connor’s ‘A Good Man Is Hard to Find’”、それに加えてオコーナーの出身地 Milledgeville に足を運び *Constitution* 紙の記事を丹念に読んだ野口肇氏の研究を手がかりにして、“A Good Man Is Hard to Find”執筆当時、オコーナーがいかに現実の世界に素材を求めたか、そして、それらの素材をいかに悲喜劇的な物語に作り変えたかを検証してみたい。

(1)

調査した年代の幅において若干の違いはあるが、Tate、Lasseterともに、“A Good Man Is Hard to Find”が執筆された1952年を中心に、当時のオコーナーが何に関心を抱いていたか、外の世界の出来事、ここでは彼女が購読していた新聞が伝える出来事が作品にどのように影響を与えたかについて検証している。

Tateは、自分が調べ上げた新聞の記事と“A Good Man Is Hard to Find”との関係から、次のように述べている。

The mounting evidence of O’Connor’s use of items from the Milledgeville and Atlanta newspapers will interest those who realize that these sources, in and of themselves, have nothing to do with the Gothic, the grotesque, the American Romance tradition, Southwestern humor, Southern literature, adolescent aggression, the New Hermeneutics, the anxiety of influence, structuralism, Pentecostal Gnosticism, medieval theology, Christian humanism, existentialism, or the Roman Catholic Church.¹²

Tateは、新聞記事という極めて日常性に根ざした素材そのものが、オコーナーの作品に従来貼られてきた大げさな文学のジャンル名とは「何の関係もない」ことを示すと同時に、それらの素材がオコーナーの想像力（オコーナー自身の言葉によれば、「ミンチ器械」¹³によって、多種多様な評価を生み出して止まない小説に変容した不思議さを指摘しているのだ。

一方、Lasseter はオコーナーが“A Good Man Is Hard to Find”執筆中、つまり、1950年から1953年にかけて、*Atlanta Constitution* 紙を定期的に読んでいて、すでに発症していた難病のLupusがもたらす外の社会からの隔絶を補おうとしていた事実を *The Habit of Being* に収録された手紙から推測している。Lasseter は、本作品以外にも新聞に掲載されたさまざまな記事が彼女の小説に直接、間接的に影響を及ぼしたかを指摘しながら、オコーナーがそのような新聞記事にいかに興味を持ったかについては、「私は古新聞、切り抜き、破れた原稿、昔の季刊誌などからなるネズミの巣のなかに暮らしています。」(Lasseter, 227) という面白い言葉を紹介している。結果的にオコーナーが新聞の切り抜きを「精神的な反抗が精神的な自惚れと衝突する話」(Lasseter, 230)、言い換えれば、「ジョージアの田舎道で展開される神学と暴力の

話」(Lasseter, 227)に変えた事実に驚き、さらに詳細な調査がオコーナーの作品制作のプロセスの解明につながると Lasseter は信じている。

さて、この作品で最も読者の目を引くのは、「哲学的精神病者」¹⁴と呼ばれる主人公が遂行する凄惨な殺人のシーンもさることながら、彼の名前ミスフィット (The Misfit) である。このミスフィットという名前については、両批評家はその由来に関心を寄せているが、実際の強盗が「ミスフィット」なる名前を使って事件を起こし新聞に登場したことそれだけが、オコーナーにこの小説を書かせたわけではないということも共通して認識している。「元祖ミスフィットは、犯罪者によくあるように、取るに足らない男であった。野心のない泥棒であって、それ以上ではなかった。オコーナーはその男から目立つ名前を拝借しただけである。」(Tate, 99) と Tate は断定している。したがって、Tate はそのミスフィットの事件とほぼ時期を同じくして起こったもっとセンセーショナルな事件のほうに多くの関心を寄せている。一方、Lasseter は、その二つの事件が新聞紙上を賑わす以前に遡って、*Atlanta Constitution* の社会面(正確に言えば、1950年の2月15日付けの記事から)に注目し、作品のミスフィットと関連する多くの犯罪事例を渉猟し、それらの事件がオコーナーの想像力にいかにかきつけたかについての貴重な資料を我々に提供している。

以下、実際の「ミスフィット」なる人物が関係する事件が起こる1952年の秋口以前の数々の事件の中で“A Good Man Is Hard to Find”と関係のあるものを Lasseter の調査に基いて整理してみる。

1950年2月15日：*Constitution* は、強盗に三時間捕えられたニューオーリアンズの男性とその子ども達の話の一面記事として載せている。二人の強盗は少年には漫画本を与え、父親には酒を与えるという異常な親切を發揮した。その結果、彼らは、“Two Gentle People Win Dad’s Praise as Kindest Bandits He Ever met”という見出しを獲得した。

1950年2月22日：オコーナーは Jack Ellis Vines の記事に気付いたかもしれない。彼は、三十もの武装強盗のかどで120年間の刑に処されていた。仮出所のための更正の印として、Vines氏は、叙任を受けて牧師になると宣言した。「強盗の牧師」(robber-preacher)というアイデアは、たしかに、オコーナーの注意を引いたことだろう。「親切な強盗」という性格に「宗教的な次元」を加えることになったのだ。同じ日の新聞にオコーナーは多分、もっと暴力的な記事を読んだだろう：North CarolinaのRaleighでKKKに鞭で叩かれたという女性による匿名証言である。“A Good Man Is Hard to Find”の「ミスフィット」は「おれは女が鞭で叩かれるのを見た」のだから、多分この暴力的なイメージが、「親切な強盗」という単純な話のアイデアをもっと複雑で不安を呼び起こす(disturbing)ものへと変え始めただろう。

1951年6月15日：オコーナーがエモリー病院に入院したその夏、もう一つ「親切な強盗」の記事が出た。「三人の脱獄囚」が人質を解放した時、彼らは二人の子どもの母親に60セント与えた。犠牲者たちは、囚人たちが「とっても気を使ってくれた」と言った。

1951年7月11日：この頃までには、一人の男の人物像がオコーナーの頭の中に育っていた

であろう。宗教的な側面が新たに重要性を帯びだしたのは、武装強盗に加わった30才の伝道師についての記事を読んだからだ。その男の兄 (Bernie Lee) ともう一人の仲間がアトランタの食料品店主を襲った際、致命的な傷を負わせたが、本人は逃走の車の中で跪いて祈ったという話である。

1951年8月4日: *Constitution* 紙に「強盗の牧師」(preacher-robber) という喜劇的な矛盾とは対照的に、一つの凶暴な犯罪の記事が載った。この話では、14才の少年がライフルを買うお金のことで父と言い争った。その際、少年は銃で父を撃った。二日後、*Constitution* 紙は、もう一つ別の父親殺しを報じた。同じ月、同紙は、「凶暴な脱獄犯」について二つの記事を書いた。今や、オコーナーは、彼女の切り抜きでできた「ネズミの巣」の中に、「親切な強盗」、「強盗の牧師」(robber-preacher)、「鞭打ち」、「数人の凶暴な脱獄犯」、「父親殺し」のストーリーを持っていたことになる。

1952年6月2日: コネチカット州に向けて出発する前に、オコーナーはきつともう一つの「鞭打ち」の話に気付いていただろう。今回は、デラウェア州の妻を殴る男を公開で鞭打った話である。

1952年8月: オコーナーは、自分の犯罪を頭痛のせいにした強盗の話を読んでいただろう。「時々、自分が何をしているか分からない。どんな考えが浮かぶか分からない。」とは、その男の弁である。ここに辛抱強く自分の(犯行の)動機を説明しようとする内省的だが暴力的な「ミスフィット」の源 (source) がある。「奥さん、おれは自分が何をしたか忘れてしまった。刑務所に座わり続け、自分がやったことを思い出そうとしてみたが、今日に至るまで思い出さないんだ。」というのは小説内のミスフィットの言葉である。

以上、Lasseter が丹念に拾い集めた記事が物語るものは、確かにどれをとっても “A Good Man Is Hard to Find” を一度読んだ読者ならば小説の該当箇所を指摘できるものばかりである。すべて暴力的な事件と被害者の悲劇がそこにあり、同時に、犯罪を犯した男たちに見られる喜劇性と善性のアンバランスが我々の興味と驚きを掻き立てて止まないものばかりである。

(2)

さて我々は年代記的には、実際の「ミスフィット」の事件に近づいたわけであるが、まず、この事件とほぼ同時期に起こった事件で Tate、Lasseter とともに注目しているある一つの事件について調べてみよう。Lasseter は、10月25日、11月1日付けの *Atlanta Constitution* 紙に掲載された事件、つまり、「James Francis “Maniac” Hill」あるいは「James Francis “Three-Gun” Hill」の事件について、2日分の記事しか取り上げていないのに対して、Tateは、10月24日、25日、27日、29日、31日、そして11月1日、13日、18日とかなり詳しく記事を追跡していることが分かる。もっとも Lasseter は、Tateが注意を払わなかった1952年以前の新聞記事について丹念に作品との関連を追及しているが、なぜ二人の研究者がこの事件にこれほどまでも紙面を割いたかは注目すべき点である。

以下、11月13日付けの *Atlanta Journal* の一つの記事を除いて *Atlanta Constitution* 紙に掲載

された記事に関する二人の研究者の考察をまとめたものであるが、「テイトの研究に与って」¹⁵と断った上で、実際の紙面に触れ記事のコピーを掲載した野口氏の研究も大いに参考になった。

10月24日：すでに述べたように、Hill についての記事の最も早いものは、Tateによると10月24日のConstitution紙の見出し、“Maniac’s Gang Terrorizes Hills”である。具体的な記事の内容をTateは次のように紹介している。

“A fantastic band of highwaymen, led by a self-styled ‘maniac’ who laughed weirdly while he looted his victims, spread terror through the Cumberland hills today... (The leader) boasted that he had escaped from the Utah State Prison and ‘killed two people’ ... ‘They call me a three-gun maniac, and brother, they got the picture straight,’ the head bandit was quoted by victims.” (Tate,100)

である。自称「気違い」、「ユタ州の刑務所を脱走し…二人を殺した」リーダーに率いられた三人組が、カンバーランド丘陵地帯を震撼させたのだ。さらに野口氏による『コンスティテューション』紙の記事のコピーを読めば、彼らが南部一帯で次々に強盗犯罪を繰り返した様が詳しく分かる。

10月25日：Tateによれば、10月25日の記事の見出しは、“Search for Kidnap-Robbery Trio Centers in Atlanta and Vicinity”である。この10月25日の記事からLasseterもこの事件を取り上げている。Lasseterによれば、記事は一番最近のHillの誘拐の犠牲者の名前を挙げ、彼らがギャングたちによってテネシーからアトランタまで車を運転させられたこと、テネシーの狩猟者を誘拐し、その仲間を車のトランクに閉じこめてから、Hillはその犠牲者に8ドルを与え、その金で家に戻り、仲間を解放させたことを伝えている。(Lasseter,229)

10月27、29、31日：この期間のHillについての記事を取り上げているのは、主にTateである。それぞれの日付の新聞の見出しは、“Chattanooga Is Focal Point For Manhunt” (Oct.27)、“2nd of Terror Gang seized in Florida Pal said Still in Atlanta Area” (Oct.29)、“Self-Styled 3-Gun Maniac Frees 4 Road Gang Convicts at Gunpoint” (Oct.31 Bartow, Florida発)である。テネシー州からフロリダ州へ向けて逃走した犯人たちを追って、文字通り「南部の歴史上最大規模の捜査」(Lasseter,229)が行われ、すでに10月29日までに三人のうちリーダーのHillを除いて二人が逮捕されていることが分かる。注目すべきは、31日の記事によると「まだアトランタにいるはず」のHillが、逮捕されてしまった二人の仲間の代わりになる新たな仲間を集めようとしたのだろうか、フロリダ州のBartowという町で道路工事中の囚人四人を開放させ、追われた結果、「行き止まりに来ると車を乗り棄てた。彼らは鬱蒼とした森の中に歩いて逃げ込んだ。」(Tate,100)という点である。もし実際の事件と小説とをそのまま重ね合わせることが許されるならば、31日付けの『アトランタ・ジャーナル』紙のミスフィットがフロリダへ向かったという記事を根拠にした祖母の心配は正当なものであり、その心配は翌日に現実のものとなるのだ。

11月1日：11月1日の動きについては、Lasseter のほうが詳しい。Lasseter によれば、当時盛んに報道されていた Eisenhower と Stevenson との間の大統領選挙の記事に張り合うようにして、Hill 逮捕の記事と彼の顔写真が出た。(実際の記事の見出しは、“‘Maniac’ Hill Gives Up at Last Barrier”と“Road Block Proves Trap For ‘Maniac’ ”)¹⁶すでに主犯の Hill の顔写真は、10月25日付けの記事に掲載されているが¹⁷、この日の記事では、Tate は「眼鏡をかけた、頬のこけた強盗」(Tate,100)という点に注目し、Lasseter には、「年齢と分別と親切さ」(Lasseter,229)を感じさせた。まさに、凶悪であり、かつ親切な小説のミスフィットについての描写を髣髴とさせる。結局、フロリダ州の検問で逮捕されたわけだが、Lasseter は最近フロリダの刑務所を「出所」し、連続20件の誘拐事件を中心に「二週間の暴走」を起こし、「名もないギャングから公衆の敵としてトップランクにまで駆け上がった」こと、さらに、理由を問われて、彼が「理解できないくらいの刑期を食らったので、少し、楽しんでほうがましと思った、と語った」(Lasseter,230)という事実に注目している。

11月13日、18日：Lasseter が11月1日付けの記事で Hill についての問題を終わりにしているのに対して、Tateは、日付の確認できるものでは、11月13日 (“‘SEE A LAWYER’ 3-Gun Hill’s Guilty Plea Turned Down” チャタヌーガ発と“Hearing Delayed For ‘Maniac’ Hill And 2 Cronies”チャタヌーガ発)、18日 (“‘Maniac’ Hill is Adjudged Incompetent” チャタヌーガ発)に至るまでHillの裁判の行方を追跡している。少なくとも見出しから読み取れる裁判の行方は、Hill が精神障害の疑いで責任能力がない、つまり、無罪と判断されテネシー州の精神病治療の施設に送られた (Tate,101) ことである。それを裏付ける証拠は、相変わらず Hill の言動の中にある、とTateは言う。それは、Hill の「敬意を込めた話し方」(Tate,100)であり、自ら「ご婦人がたの前では悪態をついたことはない」(Tate,100)と主張したりした点である。Hill の事件と“A Good Man Is Hard to Find”との関係を総括して、Lasseter は、「新聞の記事はオコーナーに、優しく (gentle)、丁寧 (polite)、だが、凶悪な (dangerous) 犯人、それも楽しみのために誘拐をする犯人の性格を思いつかせた」(Lasseter, 230)と述べている。

以上、小説の主人公の性格の骨組みとなるいわゆる「気違いヒル」の事件の概要を二人の研究者の考証を基に集約した。ヒルが提供した主人公像に今や欠けているものは彼の特異な名前だけとなったが、この事件とほぼ時期を同じくして、世間の耳目を集めた銀行強盗事件が起こったのである。

11月6日、11、15日：さて問題のミスフィットという名前だが、オコーナーにこの名前を思いつかせた事件が、11月6日に起こった。Constitution 紙のその日の見出しは、“‘The Misfit’ Robs Office, Escapes With \$150” (「ミスフィット」銀行を襲い、\$150を奪い逃走)である。Flannery O’Connor Bulletin, Vol.III, Autumn 1974 に収録された記事の内容によれば、アトランタ連邦貯蓄貸付銀行を襲ったその男は「年齢30才、背丈6フィート、体重175ポンドくらいで、ニッケル鋼の銃を持って」いて、「係に窓口越しに袋を突き出したが、その袋には、<ここに150\$を入れろ、何も言うな。俺は銃を持っているし、俺は「ミスフィット」

だ」と書いてあった。」¹⁸である。

Lasseter は、この事件についての言及は11月6日の記事に触れただけで終えているが、野口氏は11月11日の “‘Misfit’ Suspect / In Lunacy Trial” の記事、氏とTateは11月15日付けの Atlanta Journal の “‘Misfit’ Bandit / Hospitalized” の記事を取り上げている。野口氏の調査した記事は、すでにミスフィットが逮捕されていて、精神鑑定のための審理が11日に予定されていることを伝えているが、15日の記事しか言及していないTateによると、「ミスフィットは11月15日の時点ですでに逮捕されて」いて、「年齢は25歳で、本名は James C. Yancey である。精神に異常をきたして、ミレッジビルの州精神病院に収容された」(Tate,99) となっている。

Lasseter、Tate とともに、名前の特異さを除けば、この強盗をどこにでもいる「取るに足らない男」(“small-time criminal,” Lasseter, 230)、「小もの」(“small potatoes,” Tate,99) と断定している。確かにそうであろう。しかも、すでに逮捕され、精神鑑定を受け、精神病院に収容されてしまったのである。この男は社会的に「不適合者」であると同時に、精神的に「不適合者」であることも証明したわけで、その意味ではミスフィットというネーミングに深みを与えたことは言えるであろう。しかし、Tateの言うように、我がミスフィットは「元祖ミスフィットよりも壮大な仕方で居場所のない」(Tate,98) 人間である。オコーナーが、この自称社会的「不適合」の男をヒントに精神的な「不適合」を訴える主人公のミスフィットを造形した点が重要であることは言うまでもないが、小説のミスフィットの精神的「不適合」が、いわゆる狂人を表すことはありえないし、我々に残された課題は、彼が「宗教的反逆者」¹⁹、「哲学的精神病者」²⁰と呼ばれる意味を考察することである。

小説中の主人公はこれで“A Good Man Is Hard to Find”をオコーナーの最もポピュラーな小説にするのに大きく貢献したその名前を獲得したわけであり、TateとLasseterがHillの事件と自称「ミスフィット」の事件が世間を騒がせた点、小説のミスフィットとの類似性の多さという点から検証の中心に据えているのは当然である。さらに付け加えるならば、これらの事件と同時進行する形、あるいは、これらの事件が終息した後、オコーナーがこの小説を構成する上で、恐らく参考にしたであろうと思われる新聞記事を一件ずつ取り上げている。

11月5日：Tateによれば、11月5日のニューヨーク発で『アトランタ・ジャーナル』には、“human interest”の欄に書かれているある男の話がある。この男の記憶では、警察官を1928年に射殺し、以来、20年以上も良心の呵責に悩まされたのだ。彼の話をもとに捜査が行われた結果、当の警官は生き延びていたことが判明した。その男に対しては、当局によれば、「彼の良心が彼を十分に罰した」(Tate, 101) ということで、告発が行われなかったのだ。まさに、犯してもいない罪のために罰されたミスフィットの逆を行く話として、オコーナーの想像力を刺激したのではないかとTateは考えているのである。

11月19日：Lasseterは、11月19日の『アトランタ・コンスティテューション』紙に載った「ある敬虔な60歳の女性」の話に関心を寄せている。その女性は、小説の中のベイリーの家族のように、奇しくも道路際の溝に車ごと転落し、5日間生き延びたというのだ。おそらく、「善きサマリア人」がそこを通過し、彼女は救助されたに違いない。彼女は「神が誰かを助

けに来させてくれると分かっていました」(Lasseter, 230) と言ったというのだ。老女の転落事故という話は、祖母率いる家族が道路際の溝に転落した事件に重なることは言うまでもないが、この話もオコーナーは逆の使い方をしたと思われる。「善きサマリア人」が世の中には多いし、特に、hospitable なアメリカ南部でのこの実話は珍しくはない。しかし、小説内では「敬虔さ」にいささか問題のある祖母の願いにもかかわらず、「神が誰かを助けに來させる」ことはなかった。要するに、記事に反して小説は「人情味あふれる」事件とはならなかったのだ。

TateもLasseterも自称「ミスフィット」、本名 James C. Yancey の事件もさることながら、それ以上に自称「三人組の殺人狂」の James Francis Hill の事件を主な考察の対象にしている。Lasseter の考察の特徴は、“A Good Man Is Hard to Find” 執筆時に限定せず、「恐らくオコーナーが切り抜いたであろう」(Lasseter,228) 記事を『アトランタ・コンスティテューション』紙の中に求めて1950年まで遡ったことである。まさしく、彼はオコーナーの「ネズミの巣」を掻き分ける気持ちで、作品と関連する記事を探し回ったことになる。

(3)

我々の今後の仕事は、これまでに行われた Tate と Lasseter の論文を合成、モンタージュして、作品との逐語的な関連に言及すること、それだけではない。それは、作品とオコーナーの社会的な関心とを関連付ける重要な仕事には違いない。しかし、それを追求しすぎること、あるいは、それに終わることは、逆にオコーナーの想像力の働きを過少評価することにつながることは目に見えている。したがって、我々の仕事は、二人の研究者の資料を尊重しながら、作品“A Good Man Is Hard to Find”を読み、オコーナーが強調するところの「芸術が人生に加えた新たな次元」(Lasseter,231)の本質を探ることである。その仕事の入り口は、Lasseter の次の言葉、「こういった新聞の記事から、オコーナーは神秘というものを中心に据えた小説を創造した。“Maniac” Hillとアトランタのミスフィットから、彼女は現代のアンチ・キリストの象徴を創造し、信心深い事故の犠牲者からは典型的な現代の不信心者を創造した。」(Lasseter, 231)にあると思われる。

(注)

- (1) W.S. Marks, III, “Advertisements for Grace: Flannery O’Connor’s ‘A Good Man Is Hard to Find,’” *Studies In Short Fiction*, vol.IV, Fall, 1966, p.21.
- (2) Frederick Asals, *The Imagination of Extremity* (University of Georgia Press, 1982), p.142.
- (3) William S. Doxy, “A Dissenting Opinion of Flannery O’Conner’s ‘A Good Man Is Hard to Find,’” *Studies in Short Fiction*, 10, 1973, p.35. Martha Stephens, *The Question of Flannery O’Connor* (Louisiana State University Press, 1973), p.18.

- (4) Kathleen G. Ochshorn, "A Cloak of Grace: Contradictions in 'A Good Man Is Hard to Find,'" *Studies in Short Fiction*, Spring, 1990, p.114. Kathleen Feeley, *Voice of the Peacock* (Fordham University Press, 1982), p.69, Stephen C. Bandy, " 'One of My Babies' : The Misfit and the Grandmother," *Studies in Short Fiction* 33, 1996, p.107, Madison Jones, "A Good Man's Predicament," *The Southern Review* 20 (1984), p.114.
- (5) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners* (Farrar, Straus and Giroux, 1969), p.109.
- (6) *Ibid.*, p.113.
- (7) Martha Stephens, *op. cit.*
- (8) *Loc.cit.*
- (9) Kathleen Feeley, *op. cit.*
- (10) Frederick Asals, *op.cit.*, p.149.
- (11) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners*, *op. cit.*, p.108.
- (12) J.O. Tate, "A Good Source Is Not So Hard To Find," *Flannery O'Connor Bulletin*, 1980, p.98.
以下、Tateからの引用は、Tateの後に頁数のみを記す。
- (13) Victor Lasseter, "The Genesis of Flannery O'Connor's 'A Good Man Is Hard to Find,'" *Studies in American Fiction*, vol 10, 1982, p.231. 以下、Lasseterからの引用はLasseterの後に頁数のみを記す。
- (14) Preston M. Browning, Jr., *Flannery O'Connor* (Southern Illinois University Press, 1974, p.55.
- (15) Hajime Noguchi, *The Study of Flannery O'Connor* (Bunka-Shobo Hakubun-Sha, 1992), p.173.
- (16) *Ibid.*, p.172.
- (17) *Ibid.*, p.174.
- (18) *Flannery O'Connor Bulletin*, vol III, 1974, p.94.
- (19) Robert H. Brinkmeyer, Jr., *The Art and Vision of Flannery O'Connor* (Louisiana State University Press, 1989), p.160.
- (20) Preston M. Browning, Jr., *op. cit.*